



INHALT

Helmut Schumacher (Mannheim): Morphosyntaktische Beschreibung in Valenzwörterbüchern deutscher Verben	1
Tamotsu Yoshida (Tokio): Über Minimalvalenz und Maximalvalenz	18
Wilhelm Bondzio (Berlin): Das Wesen der Valenz und ihre Stellung im Rahmen der Satzstruktur	29
Eugenio Coseriu (Tübingen): Verbinhalt, Aktanten, Diathese. Zur japanischen Ukemi-Bildung	45
Shoko Kishitani (Tokio): Die Diathese im Japanischen. Einige Bemerkungen zum Aufsatz Herrn E. Coserius	66
Tohru Kaneko (Chiba): Valenztheorie und kontrastive Forschung	70
Fuyuki Kido (Tokio): Versuch einer Bedeutungsanalyse bei Synonymen auf Grundlage der Kollokation	74
Eugenio Coseriu (Tübingen): Der Mensch und seine Sprache	97

Arbeitskreis für
deutsche Grammatik

目次

ドイツ動詞の結合価辞典における 形態統語論的記述	H・シューマッハー (1)
動詞結合価の最小値と最大値について —結合価の概念を添加成分にも拡大する一つの試み—	吉田 有 (18)
展開値の本質と文構造の枠内での位置	W・ボンツィオ (29)
動詞内容動詞の共演成分態 —日本語の受け身構文について—	E・コセリウ (45)
日本語の動詞の態をどうとらえるか —E・コセリウ氏の論文を読んで—	岸谷敏子 (66)
動詞価理論と対照研究	金子 亨 (70)
Kollokationによる類義語分析 1979 ¹⁾ —動詞 bekommen, erhalten, empfangen, kriegen—	木藤冬樹 (74)
言語と人間	E・コセリウ (97)
ドイツ文法理論研究会会員名簿 (116)	
ドイツ文法理論研究会案内 (96)	
編集後記 (118)	

言語学 第6号

ドイツ文法理論研究会

言語と人間¹⁾

E. コセリウ

訳注：江沢 建之助

昨年9月16日から10月7日まで来日し、東京、名古屋、大阪の大学、研究所で一般言語学とロマンス言語学上のテーマについて講演した Eugenio Coseriu [エウジェニオ・コセリウ] 教授は1921年ルーマニアに生まれ、1951年から1963年までモンテヴィデオ大学(ウルグアイ)、1963年以来テュービンゲン大学(西ドイツ)の一般言語学およびロマンス言語学の教授。主著は *Sincronía diacronía e historia* (1958), *Teoría del lenguaje y lingüística general* [論文集] (1962)。はじめ主としてスペイン語で研究を発表したため、ヨーロッパでもロマンス語学界で主として知られたが、主著及び主要論文の各国語訳が出るにおよんで広く国際的にも知られ、最近ではドイツ語による論文、著書が多い。日本語でも次々と訳が出版される予定なので、訳注には必要に応じてその著作の原題を引用して日本語の仮訳と、ドイツ語訳がある場合にはその訳題と発表の場所も挙げた。訳文中〔 〕に入っている部分は訳者が理解上の便のために補ったものである。

言語については、言うべきことは、本当はもうほとんど言いつくされています。いやそれどころか、むしろそれについては言わない方がよいようなことまで、実にいろいろと言われてきており、また現にさかんに言われています。これはひとつには言語自身に原因があります。すなわち、言語というものは、ほんの皮相的に観察しただけでも、実に多種多様を極めた現象であり、しかも、それ以外の人間現象にとっては言語による表現以外の表現はないものさえあるために、言語は人間界のありとあらゆるところに入りこみ、その結果、こと言語に関しては勘違いや片手落ちが起こることがほかの場合よりもはるかに多い、と言えるのではないかと思います。特に、それはある程度までは仕方がないこととしても、言語の場合、第二義的なこと、肝心でない、末梢の事柄が、本質的な、第一義的なことと考えられやすいのです。それで、私はここで、言語の問題をごく一般的な形でもういちど取り上げ、当っていることを当っていないことから区別し、とりわけ、われわれが言語とは何かを考える場合に、いちばん道を誤りやすい諸点を指摘してみようと思います。

われわれが言語をちょっと観察しただけでもすぐに確認し得る第一のことは、言語が具体的には人間の或る特別な、容易にそれとわかる活動として現れる、ということです。これを話^(a) [Sprechen] あるいは言^(b) [Rede] としての言語と呼びましょう²⁾。この第一の確認にもついで、われわれは「人間は話す存在である」、あるいはもう一歩進めて「人間は話す唯一の存在である」、といった人間の定義を下し、更に「話す」とはいったい何かをもっと正確に規定することによって、もっと立ち入った、もっとしっかりした人間の定義を作ることができるとでしょう。同じ確認によってしかしまわれわれは、

話さないということの意味をきめることもできます。話さないとは、普通の、成人で睡眠中でない人間の場合は、黙ること、つまり話すのをやめたこと、あるいはまだ話さない、ということです。話さないとはつまり、話しに区切りをつける、あるいは話しをよす、という意味での話⁽⁴⁾の否定であります。或る種の言語には事物の静寂と人間の沈黙に対してそれぞれ別の単語があります(たとえばラテン語の *silere* と *tacere*) が、これはそういうもともと人間の持つ素朴な考え方が言語に現われたものです。それで、話すことを故意によすこととして、沈黙は表現手段のひとつにさえなることができるわけです。ところがこの同じ確認にもとづいている誤ったあるいは一面的な言語の解釈に到達することも可能です。まず、われわれはとかく言語を単に人間の(沈黙も含めての)さまざまな経験的主観的表現活動のひとつにすぎないと考え勝ちですが、それは誤りです。たしかに、たとえば沈黙にも意[Sinn]³⁾はあります。あるいは、沈黙は様々の言語的意味[Bedeutung]とあいまって言(%)の意を作りあげるのに役立つ、と言った方がいいでしょう。しかし、沈黙は言語ではないでしょう。なぜなら、沈黙にはそれ固有の意味[Bedeutung]というものがありません。それは、ほかの表現活動でも、それが言語から派生した、言語の代りと考えられる活動でない限りは、同じことです。いや言語自身でさえも、その物質面[音声面]を主観的な意はあるが客観的な意味のない表現手段として用いることができます(たとえば話者の態度あるいは状態を表現するために)。しかし、この場合には言語はまさに言語としては実現されていないわけです。そういうわけで、言語を単に主観的な表現活動に還元することを排除することにより、われわれは、客観的な意味こそが言語の言語としての現れに不可欠であることを確認するわけですが、この確認の意味についてはここではこれ以上問わぬことにいたします。他方において、われわれは、言語を言(%)と見なすことによって、言語の機能、すなわち言語の働き、目的を、言行為[Redeakt]の機能あるいは機能の一種と同一視し勝ちです。たとえば、言語は考えの表現のためにあるとか、あるいは逆に、言語は考えをかくし、ひとに知らせないためにある、などと主張したり、あるいは、言行為における主な表現目的は何であるかをきめようとしたり、また言語を、それが「何々のためにある」とか「主としてこれこれの目的に用いられる」と言うことによって、定義しようとしたりするものがそれです。しかしそれらは言語の目的ではなく、言行為の目的にすぎません。そういうやり方では言語の本質をきめることができないのは、けだし明らかでしょう。言(%)はさまざまな、時には互いに矛盾する諸目的のためにさえ用いることができるのです。

われわれが言語を観察してすぐに行ける第二の確認は、話⁽⁴⁾としての言語が常に他者との話⁽⁴⁾である、ということです。この点において既に言語はほかの必ずしも他者に向けられた活動とは言えないいろいろな表現活動とちがっています。(むしろ、ほかの表現活動でも「他者」がその表現を受け取り、解釈して、その解釈にもとづいて自分の行動をきめるということはあります。いわゆる動物の間のコミュニケーションは大部分こ

のタイプに属するものです。しかし動物同志は実際には何も伝達し合っているのではなく、他の動物の反応をいちいち解釈しては自分の反応をきめているにすぎないのです)。この確認によってわれわれは、言語の本質が対話、話し合いにおいて現われる、すなわち言語の本質は話し手同志が共有しているものから切り離しては考えられない、ということを知ることができます。他方において、そういう確認にもとづき、言語の本質が単に実際の伝達作用とか、他者から何かを要求することとか、他人に自分のためにあるいは自分の代りに何かをさせることにある、などと結論することにもなりかねません。そういう考えが受け容れられないことは、以下の考察によってだんだんに明らかになるでしょう。

言語を観察してすぐに確認できる第三のことは、話⁽⁴⁾としての言語が常に歴史的に規定され、また制約された技術にしたがって実現されるということです。この歴史的に制約された言語のこともドイツ語では単に *Sprache* [言語] と言いますが、たいていはそれに言語の歴史的区別を示す形容詞をつけて (*deutsche Sprache* [ドイツ語], *englische Sprache* [英語] など) いうのがふつうです。ここでは、その区別をはっきりさせるために、ゲーオルク・フォン・デア・ガーベレンツ⁴⁾の用語をとってその意味での言語を *Einzelsprache* [個別言語] と呼ぶことにします。話⁽⁴⁾としての言語は、そういうわけで、常に或る個別言語を話すことであり、それによって話者はそれぞれ或る歴史的に規定された社会の一員としての役割を果たすか、あるいは少なくとも、その社会の言語的伝統をひとまず受け容れざるを得ないわけです。この、言語が常に個別言語、歴史的制約を受けた話⁽⁴⁾として現われるという事実は、誰の目にも明らかな、また言語の本質に深く根ざす事実であるために、素朴な言語意識においては、言語すなわち個別言語、それも自分の話す個別言語、と考えられていることが多く、その結果、その言語社会に属する人間だけを「話のできる人間」と(あるいは「人間」とさえ)呼び、その言語を話せない人間を「おし」だとか「話をしない人間」だとか「野蛮人」などと呼ぶことが多いのです⁵⁾。そして自分の話す言語だけを言語によって示された事物の本質にかなう、「自然な」言語と考え、ほかの言語は単にいいかげんな単語の寄せ集めにすぎない、などと思勝ちなのです。しかし、同じ様な思い込みはもっと高い段階における言語の考察にも見受けられ、たとえば、或る個別言語の種々のカテゴリーをほかのいろいろな個別言語に押しつけようとしたり、あるいは、或る歴史言語を言語そのものの理想的な実現だ、などと考えたりするのがそれです。ところで、個別言語をそれによる実際の話⁽⁴⁾から切り離して考えた場合、それはひとつの客観的な歴史的現象、「歴史的対象」であり、したがって、このような対象を事物化して、名詞的な概念によってとらえる事は容易なことです。しかしその際に、言語の本来的な存在が「動詞的」な存在(活動としての存在)であり、もろもろの歴史的言語技術がいずれもいわば「動詞修飾的」なもの、つまり活動的存在のあり方である、ということが見逃され勝ちです。古代人たちは個別

言語をまだ具体的な話⁽⁴⁾自体の中に見出し、それをこの具体的な話⁽⁴⁾のあり方と考えていました。それで、たとえばギリシヤ人は或る特定の言語を話すことに対しては、その話⁽⁴⁾の歴史的規定をも意味の中を含めた特別な動詞を使いました (*attikízein* [アッティカ風に話す], *hellénízein* [ギリシヤ風に話す], *barbarízein* [外国風に話す])。またローマ人は副詞的表現を用いました (*latine loqui* [ラテン語で話す], *graecce loqui* [ギリシヤ語で話す])。今日では、或る言語を話すとか或る言語を話せるなどと言うのでわかるように、個別言語が名詞的に考えられています。これは一面においてはひとつの重要な進歩です (しかしその根源は既に古代にあり、とりわけ言語の研究という点においてはそうです)。なぜ重要かと言えば、それによって、もろもろの歴史的言語技術をそのままあるいは相互に比較して観察することが可能となるからです。文法というもの、そして或る意味では全言語学がこの言語の見方に基礎を置いているのです。同時に、言語を個別言語として見ることは、言語を言行為のその時々々の条件や目的から切り離し、それによって言語のもつ普遍的性格にもっと近づき、また言⁽⁵⁾のその時々々の目的を言語の可能性とは考えても、言語の本質とは考えないことを可能にしてくれます。その上、個別言語間の相違を確認し、それを動機とする諸言語の比較を行なうことによって、われわれは、言語を言語によって指示される事物から切り離し、それによって、言語が決して既に与えられている事物に対する単語の寄せ集めではなく、言語外的経験の“*phýsei*” [必然性に] も “*théseis*” [慣習に] も従わない⁶⁾、つまり言語上の区別が決して自然によって与えられた必然的なものではなく、したがって個別言語はその内容面においても音声面においてもいわゆる「恣意的な」[*willkürlich*] もの、つまり歴史的動機だけを持って自然的動機 (因果性) は持たないものである、という結論に到達することができます⁷⁾。

しかし同時に、話⁽⁴⁾から切り離された個別言語というものがあつたことを認識することにより、われわれはまた次のようなまちがった考えに陥る危険もあります：

- a) 言語の非言語的なものへの関係を見逃し、言語がその自律性 [Autonomie] にもかかわらずやはり非言語的なものの認識の一形式であるという重要な事実を忘れる危険⁸⁾。
- b) 素朴な話者の言語観を軽率に頭から問題にしなかったり、あるいは軽視したりする危険。むろんそのような言語観を言語の説明と考えることはできませんが、しかしそれは言語の重要な事実的条件をなすものと考えなければならぬものです。なぜなら言語は言語学者のために、また言語学者によって機能しているものではなく、話者のために、また話者によって機能しているものだからです。その意味で素朴な話者がその言語をどう考えているか、ということは、その言語が機能する上で決定的なことなのです。つまり、話者のその言語についてのいろいろな意見は、「言語」という客体の一部をなすもので、この事は決して閑却されてはならないのです⁹⁾。

- c) 個別言語について確認されたことの経験的一般性 [Allgemeinheit] と言語自体の普遍性 [Universalität] を取りちがえたり同一視したりする危険。そうすることは、一方において、言語のカテゴリーを個別言語に関係させて定義しようとするにほかなりません。たしかに個別言語の範囲内でも種々のカテゴリーとその相互の関係を確認し、その言語表現としての現れを記述することは可能ですが、個別言語の範囲内ではカテゴリーを定義することは不可能です。なぜなら、たったひとつの個別言語だけに確認されたカテゴリーでもカテゴリーであるからには普遍的なものであり、したがって、普遍的にしか定義できないからです。他方において、それはまた、言語というものを単に諸個別言語の総和とのみ考え、なぜとも個別言語というものがあるのかということを問わず、言語理論を諸個別言語の経験的研究の最終的結果、終点と考えることを意味します。しかし、実際には、すべての個別言語の研究は必然的に最初から何らかの言語理論をもとにしているのです¹⁰⁾。
- d) 個別言語間の相違を誇張して、すべての個別言語をそれだけで完結したものと考え、ひとつの言語から他の言語に行きつくことがもはやできないかの様に思いこむ危険。しかし実際には、個別言語というものは、たしかに歴史的独自性をもったものではありますが、この独自性は「言語」という普遍的なものの中における独自性であつて、したがってすべての個別言語は、フンボルト¹¹⁾が考えたように、すべての他の言語への鍵と考えることができるのです。
- e) 個別言語の技術的性格を正しく理解しない危険。たしかにすべての個別言語の技術は、その記述を見ると、ほとんど無限に複雑な様に見えます。おそらく言語ほど複雑な技術はないと言うこともできるでしょう。事実今までに詳しく完全に記述しつくされた個別言語はひとつもありません。しかし、言語がそれにもかかわらず人々によって話されているために、やもすれば言語を話すことを無意識な活動のように見なし、話者はその言語の規則を意識していないなどと主張し勝ちです。しかし実際には、話能力、すなわち自分で話した他人によって話されたことを理解する能力は、理論的ではないにしても、しかし明瞭な、確実な知識にもとづくものです¹²⁾。この知識はライブニッツが明瞭にして整わず (すなわち確実ではあるが理由づけられない)、判明にして合わず (すなわち部分的にしか理由づけられない) と呼んだ知識¹³⁾、言いかえれば、技術的な知識なのです。そしてこの知識を支える諸原理は多くの場合きわめて簡単なものです。複雑になるのはむしろ、この諸原理をはっきりそれと記述しようとして、直観に与えられているものから判明にして妥当な、すなわち理論的な知識に移行しようとするに由るものです。言ってみれば、複雑なのは文法家の文法であつて、話者の文法ではないのです。
- f) 研究するために話⁽⁴⁾から抽象され、客体化された個別言語を、生産結果、静的な生産物 [Erzeugnis] と考え、言語が生産 [Erzeugung] であるという事を見失う危

険。われわれは言(言)を個別言語がただその時々を実現されたものにすぎない様に考えて、それが同時に言語の生産、伸展であることを忘れ、そのために言語と言(言)との関係を単に符号と情報(コードとメッセージ)と同じタイプの関係に還元し勝ちです。たしかに、言(言)は個別言語の範囲内で個別言語の規則にしたがって現れるものですが、それは同時に個別言語の生産なのです。もっと簡単に言えば、言(言)とは具体的な生産としての言語なのです。これに対して、個別言語を静的な生産物と考えるならば、われわれは言語の示す動態、すなわち言語の歴史の変遷を理解することができなくなってしまいます。実際、ひとびとは言語の歴史の変遷を言語の示すパドックスな現象(個別言語は変化する筈がないのにやはり変化する)と考えたり、言語変遷を単に外面的な現象、外的原因によって起るものと解釈したりしたのです¹⁴⁾。

さて、この最後に指摘した誤り(それに限りませんが)を避け、また一般に共時態 [Synchronie] と通時態 [Diachronie] の区別の含むアポリー¹⁵⁾といわれているものを解消することは、言語をフンボルトの意味で *enérgeia* [働き] と考えることによって可能です。フンボルトの「人類諸言語の構造の相違について」という大論文には「それ(言語)は、作られたもの [Werk] (エルゴン)ではなく、働き [Tätigkeit] (エネルゲイア)である」と書かれています¹⁶⁾。このフンボルトの言葉は近代言語学でよく引き合いに出されますが、残念ながら正確に解釈されていることはまれです。たいていは、フンボルトはそれによって言語のいわゆる「生命力」を強調しようとしたのであるとか、フンボルトは言語を第一義的に言(言)、あるいは話活動と考えていたのであるとか言うのが普通ですが、なかにはこのフンボルトの区別¹⁷⁾をソシュールの *langue* [言語] と *parole* [言(言)] という全く別の意味を持った区別と同一視する人さえいます。そしてほとんどいつも、一番肝心な点、すなわちフンボルトがアリストテレス的思考の持主であり、この言葉によってまさにその思考のアリストテレス的基盤をほのめかそうとしたのであるということに注意が払われません。事実、フンボルトは、ただ「働き」、「作られたもの」とは書いておらず、すぐそのあとにアリストテレスの “*enérgeia*” と “*érgon*” というギリシャ語の哲学用語をつけ加えています。それによって、フンボルトが「働き」というのは、決して普通の行為ではなく、或る特別な、一定の活動、アリストテレスの言う *enérgeia*、すなわち可能性 [Potenz] (*dýnamis*) に先行するものとしての活動、つまり創造的な活動、哲学的な意味で自由な活動であることがはっきりわかります¹⁸⁾。そして自由な活動とは当然ながら(シュリングの言う様に)その対象が無限である活動であります¹⁹⁾。したがって、言語を *enérgeia* として理解するとは、言語をそのすべての形において創造的活動と考えることを意味します。言語は、一般的な意味での言語としても、言(言)としても、ともに *enérgeia* であります。どんな言行為も或る程度までは創造的な行為であります(そのために言(言)の解釈に際してその前後関係や状況を一緒に考える必要があるわけです。ただ、その前後関係や状況がたいていわれわれ自身にあらかじめわ

かっており、それが同時にわれわれにとっての前後関係であり状況でもあるために、われわれはどうしても、言行為が常に無限に多くの関連によってその意味を補われ、規定されるという事実を看過し勝ちなのです)。しかしまた個別言語も、それぞれ歴史的な制約の下に成り立つものにほかならない以上、やはり *enérgeia* であります。それ故に個別言語もまた動的に解釈されねばなりません。北アメリカの言語学の一派は最近になってフンボルトの考えの一部を出発点として個別言語を言語の生成として解釈することを始めました。しかしこの学派の代表者たちはフンボルトを決して正しく理解しておらず、共時態と通時態の分離の考えにとらわれて、フンボルトに対して、フンボルトは言語法則を適用する創造的活動と言語法則を変化させる創造的活動の区別をしなかったなどと非難までしています。しかしこれは不当な非難で、そういう区別をすることこそは、言語を *enérgeia* と考えるかぎりには当を得ない、と言わねばなりません。個別言語が機能することと言語が変化することとは、実際には言語自身においては二つの契機ではなく、たったひとつの契機なのであります²⁰⁾。これは言語技術を形成する層がいくつか存在することと関連しているのですが、これについてはここではほんのちょっと暗示するにとどめておきます。その層とは言語の通常態 [Norm] と体系 [System] と類型 [Sprachtypus] です。言語の通常態において通時的であるもの、すなわち言語変遷は、言語の体系という見地から見れば単に生成規則の適用、つまり言語が共時的に機能していることにすぎないのです。言語体系と言語類型との間の関係もほぼ同じです。そういうわけで個別言語は静的な生産物ではなく、生産体系であり、この体系が一部歴史的に言語的生産物の中に現実化しているにすぎないのです²¹⁾。

言語及び個別言語をこの様に解釈することは非常に数多くの、またきわめて重要な帰結をもたらします。ここではそのうちのいくつかを指摘するにとどめます。

- a) 言語を創造的活動と考えることは、言語をその点で芸術や学問や哲学の様なそれ以外の自由な諸活動と同様に見ることを意味します。
- b) 言語の創造的性格は言語技術の観察においても見逃されてはならず、言語技術とは何ものかを新たに作り出すための体系であって、歴史言語の中に既に与えられているものを単に繰り返すためのものではありません。
- c) 本来的に言語的なものはその機能によって説明されるべきで、その物質面において説明されるべきではありません。
- d) 言語現象の説明にはもっぱら目的論的な問題の立て方をすべきで、因果論的な問題の立て方をすべきではありません。
- e) 個別言語について本当にその対象にふさわしい記述をしようと思ったら、それを創造のための体系、生産の体系としてとらえ、それを既に作られたものとして叙述すべきではありません。或る個別言語、たとえばドイツ語とは、ドイツ語で話すことの可

能性の総体であって、その一部だけが歴史的に現実化されていて、一部はまだこれから現実化されるのです。この可能性は体系的であると同時にまた動的なものです。その意味でわれわれはすべての個別言語を、それ自体で完結した体系と考えずに、むしろ絶えざる体系化の過程と考えるべきであります。

われわれは、言語を *enérgeia* と規定することによって、ひとつの決定的な点に到達したことができます。言語は今やわれわれにとって、ひとつの自由な活動であります。言語はその意味で本来的に人間的なものに属するわけです。なぜなら人間の活動だけが自由だからであります。それでわれわれは言語がどのような活動であるかはわかったわけですが、言語活動とは何か、すなわち言語活動をほかの自由な諸活動から区別するものは何かは、まだ知らないわけです。つまり言語の特質をわれわれはまだ規定しておらず、したがってわれわれは、なぜ特に言語が人間の定義にとって根本的なものであるのか、またなぜ言語が常に個別言語としてあらわれるのか、なぜ諸言語、すなわち複数の言語があるのかも、わかっていないわけです。

われわれはここで機能としての言語に立ち帰らねばなりません。言語の機能が意味機能であることは一般的に認められており、また誰もそれを否定する人はいません。しかしこの機能を更に詳しく規定しようとする、とかく言語の機能がその手段的性格と同一視されがちです。言語を他の諸活動に還元し、言語を非自律的な現象と見る傾向が一般にあるのはそのためです。すなわち、言語の手段的性格、つまりその種々の使用目的を考へることによって、われわれはとかく、言語がそのために用いられるところのもの、言語が可能ならしめるところのもの、言語がそのための基礎あるいは省略形となり得るところのものを、言語の機能自体と見なす、つまり言語の本質をその内的な能力 [Leistung] によってでなく、その外面的な使用目的 [Verwendung] によって規定し勝ちです。この種の言語機能の切り下げの例として最も古いものはおそらく、言語は合理的あるいは論理的思考の手段であるとする考えでしょう。もっとも、この言語と合理的思考を同一視する考えは決して全く無根拠なものではありません。実際、意味上、感情上の諸現象も、それが言語によって言い表わされるためには、むしろ概念的現象、すなわち思考現象と化されねばなりません。なぜなら、言語は本来概念的なことしか表現しないからです。「概念的」[*begrifflich*] ということはしかしまだ「合理的」[*rational*] あるいは「論理的」[*logisch*] ということではなく、したがって、言語的あるいは概念的現象を合理的ロギス [Logos] に還元することは、人間が言い得ること、すなわちロギスの総体を一面化することにはほかなりません。言語それ自体、すなわち *lógos sēmantikós* [意味するロギス] が、命題 [Aussage] としての言語、すなわち *lógos apophantikós* [定言するロギス] に先行することは、既にアリストテレスが言っています。すなわち、アリストテレスによれば、言語自体においてはまだ実在と非実在の区別がなされず、また真と誤りの区別もなく、これらの区別は命題としての文、すなわち言語的

を事柄の事態に転ずるロギスにおいてはじめてあらわれるのであります。そういうわけで命題としての言語、*lógos apophantikós* は、言語、すなわち *lógos sēmantikós* ではありませんが、単に言語ではなく、それ以上の或る規定を受けた言語なのであります²³⁾。

もうひとつの言語機能の切り下げは、言語を実生活、すなわち人間や事物との実際の交渉のための手段とみなすことです。たしかに、言語は実際の目的に用いることができ、それどころか言語によって实际生活がきわめて楽になるということは事実です。ただ問題は、なぜこのような実際の目的のためにいろいろな概念的意味が作られたのか、ということです。なぜなら、この世界に実際に処して行くためには本来概念は必ずしも必要ではありません。実際の「コミュニケーション」なら人間と同じ意味では言語を持ち合わせていない動物にも見受けられます。それで(カルナップ²³⁾の様に)個別言語、たとえば英語を「主として或る共同社会の成員間のコミュニケーション及び活動の調整の目的のために用いられる」活動の体系などと定義するのも、言語機能の切り下げと言わねばなりません。ここで問題とされる様な共同社会はそれ自体として個別言語以前には存在し得ず、個別言語によって始めて成立するのであり、それは実際のところ言語社会 [Sprachgemeinschaft] にほかならないのですから、こういった定義は明らかに循環論法です。

言語の自律性を主張し、言語を言語以外のものに切り下げることに反対する思想家たちの中には、言語と詩文 [Dichtung] を同一視することもその様な切り下げだと考へる人もいます(たとえば W.M. アーバン)²⁴⁾。個別言語の詩作への使用はたしかに实际的な行為であり、言語の手段的性格と無関係ではありません。しかし、すぐあとに述べる様に、言語と詩文を同一と考へることにはまたほかの意味があるのです。

では言語をその様に言語以外のものに切り下げることを一切拒否した場合、言語自身のもつ自律的な内容とはいったいどの様にしてきめることができるのでしょうか? もういちど意味機能に立ち戻って考えましょう。言語的なものが意味を持つ表現 [Ausdruck mit Bedeutung] あるいは同時に表現であり意味であるもの [Ausdruck und Bedeutung] であることはまちがいない様に思われます。表現と意味が一体をなしたものはよく記号 [Zeichen] と呼ばれます。したがって言語的なものとは記号的なものとして解釈することができ、言語とは記号の世界というもっと広い分野の特別な一領域だと考へてもよいでしょう²⁵⁾。ただ言語の場合、記号というのはたしかに便利で使いやすい表現ですが、その意味を正しく理解し、すなわち記号の両面ともが言語内的なものであることを知って使わねばなりません。その意味で、意味を持つ表現としての言語記号とは決して何か「ほかのもの」の代りをなすものではなく、「ほかのもの」の指示 [Bezeichnung] を目指すものでしかあり得ないのです。ところが「記号」という言葉を使うと、何か言語以前に *signandum* [記号化されるべきもの] があるかの様な印象が生じ、そのためにどうしても言語をあらかじめ存在する「ことがら」のための単なる指示の体系 [Bezeichnungssystem] と考へ勝ちです。言語記号をそのように考へた場合には、言語に属す

分野としては物質的な記号〔音声面〕しか残らず、記号の内容面は言語外的なものと考えられてしまいます。これは極端な例ですが、言語学の内部で、記号の内容面は言語学的に記述可能な対象としての言語に属さず、したがって事物に関する諸学によって研究されるべきである、と主張されたことさえあります²⁶⁾。そういった主張に対しては、「赤」とか「友」とか「ふるさと」といった言語上の意味は、事物の世界においては数学上の円が存在しないと同様に存在せず、「真理」とか「健康」とか「長さ」とか「尺度」といったものにいたってはそれよりもっと存在しない、と言わねばなりません。他方において、物質的記号自体はそれによって〔言語的な〕意味を定着することがその第一の役目で、ただ第二次的にこの〔言語的な〕意味といっしょに言語外的のものに指示に用いられることができるにすぎないのです。言語の意味機能も *energeia* としての言語、創造的活動としての言語に発するものとして考えられなければなりません。すなわち、言語は意味を用いるのではなく、意味を作り出すことをその本質とし、したがってそれはまた既に存在する意味に対して単に物質的な *signa* (諸記号) を作り出すことでは決してないのです。ところで意味の創造とは認識 [Erkenntnis] にほかなりませんから、言語とは認識の定着と客観化の形式であると言うことができます。一方、認識とは、或るものをそれ自体として同じであり、ほかのすべてのものから切り離されたものと考えられることですが、これこそは正に言語の第一義的な能力であります²⁷⁾。しかし、それ自体として同じであってほかのすべてのものから切り離されたものと考えられるところのものとは、言語的認識の場合、人間の意識内容以外の何ものでもありません。むしろ物的経験の対象である諸事物もそのようなものとしてとらえられることができますが、それはそれらが経験されたものとして意識内容に属するかぎりにおいてのみ可能です。しかし意識内容は必ずしも物的経験の対象である事物でなければならないことはむしろありません。その意味で、意味として存在することは決して事物として存在することの証拠にはなりません。ケンタウロスとかトラゲラフォス²⁸⁾などは馬とか樹と全く同じ程度に言語的意味であるどころか、言語から見た場合、それらはこれらと全く同類の意味なのです。言語自体においては内的な物と外的な物の分離はないからです。われわれが物の物的存在を確認する場合、道はむしろ言語から出発して物に向かうのであって、その反対ではないのです。物の存在は、われわれがこれこれの言語的に与えられた意味にあてはまる様な存在者が物的経験の世界に見出されるかどうかを問うことによって、すなわち言語を通じてのみ、確認され得るものです。たとえば、われわれが樹や河や動物が世界に存在することを確認するという場合、それらは「樹」、「河」、「動物」としてまずわれわれの言語の中で認知され、区別されているのです。いろいろな個別言語を比較して見るとわかるように、この区別は全くちがった形でなされていることもあり得るのですから。それは決して自然によって与えられた、客観的な根拠によるものではない、むしろ経験の世界に人間が押しつけるものです。実際、「樹」という言葉は或る樹とかこの樹を意味するのではなく、単に樹であること [Baum-Sein] を意味す

るにすぎないのですから、それは当然です²⁹⁾。

意味とは、したがって、存在者 [Seiendes] の可能性、すなわち、こうこうであること [So-und-so-Sein] を内容として含むものであり、存在者自体を含むものではないわけです。言語はある存在者をそれがこうこうであることを通してただ第二次的に指示することができるにすぎないのです。しかし純粋な可能性とは普遍的なもの [Universelles] です。すなわち、言語は個別化 [Individualisierung] という第二次的操作によって始めてこうこうであることの個々の例を指示できるわけです。個別者に対する歴史的にきめられた指示である固有名詞もそういう意味では言語においては第二次的な現象であり、それは普遍者の把握を前提としているのです (固有名詞は普通名詞によって名づけられている対象に対してだけあり、その逆ではありません)³⁰⁾。

指示は、そういうわけで、意味としての言語にもとづく言語のひとつの可能性であります。さて、この指示によってわれわれは物の世界にたどりつき、したがってこの物の世界は形づくられた世界としては言語のみによつてのみ到達可能であるということが出来るわけです。言語は言語外の物、物自体への道を開くというわけです。だから言語はまた言語外の世界との交渉である實際生活の手段であることもできるのです。しかし、もっと重要であり、もっと肝心なことは、言語により物の客観的研究ができるようになり、したがって言語を学問の端緒であり基礎をなすものと考えられることができる、ということです。言いかえれば、物の世界は人間に与えられてはいますが、それはまず言語的世界の媒介、言語的形成を通して与えられているのです。一般者の学 [Wissenschaft des Allgemeinen] の対象 (たとえば樹、魚など) も、歴史の対象 (たとえばペーター、ベルリンなど) も、哲学の対象 (たとえば真理、徳など) も、みな言語によって立てられるのです。また客観的研究において生ずる諸問題、たとえば自然科学や文化科学上の諸問題も、言語によって媒介されるものです。たとえば或る「類」 [Klasse] の存在の問題 (たとえば、樹とは何か? 語とは何か? など)、歴史的な問題、つまり個別者の存在への問い (たとえば、ペーターとは誰か? など)、哲学的な問題、つまり存在の意味への問い (たとえば、真理とは何か? など) です。あるいは、この三つの場合に対して同じ単語を用いるとすれば、それらは「船とは何か?」 (一般者の学の問い)、「それはどの船か?」 (歴史的な問い)、「船であることとは何か?」 (哲学的な問い)、という問いであると言うことができます³¹⁾。こういった問いは、實際生活で言語を普通に使用する場合にも既に現われますが、ただ實際生活ではその問いが詳しく、方法的に答えられない点がちがっています。その時々々の実際的な目的のために必要な答えて満足するわけです。学問的研究はそれらの問題を一貫した方法的なやり方で追求し、それらに詳しく答えようと努めるのです。純粋に形式的な諸関係を扱う学である数学関係の諸科学 (これも一般者の学の一つです) もむしろ言語の中に与えられている数や純粋な形についての直観にもとづくものです。

言語と学問との間の関係はそういうわけで第二次的なもの、条件づけられたものの第

一次的なもの、条件づけるものに対する関係です。この関係はしかし正しく解釈されねばなりません。「物」にはたしかに言語によってはじめて近づくことができ、それによって物は認識されたもの、区別されたものになります。しかし物に関する単に技術的な知識なら言語なしでも可能です。その様な知識は動物も持ち合わせています。言語なしには不可能なのは学問であり、Epistēmē [学知] であります。そしてそれは物のかわりに単語を使う、たとえば虎のかわりに「虎」という単語を使う方が便利で楽であるからというのでそういうのもなければ、あるいはまた、物に関する学問が単に言語的な現象を研究しさえすればよい、という意味でそういうのもありません。それどころか学問は物自体と取り組まねばならず、言語を乗り越えて物自体を認識せねばなりません。言語が学問の前提だと言うのは、言語によってのみ物の何たるかがわかり、言語的に与えられたものに関してのみ物の何たるかを問うことがそもそも可能であるからです。たとえばわれわれが動物学や三段論法で虎は野獣であるという文を使った場合、われわれはその中の「虎」という単語のかわりに一匹の虎を使うわけにはいきませんが、それはこの場合の「虎」は一匹の虎ではなく、すべての虎、すなわち実在する虎、もはや実在しない虎、まだ実在していない虎のすべてを代表する *ens rationis* [頭の中の存在] を指示するからです。哲学の場合も決して言語の分析が問題ではなく、それはまず言語による媒介を経なければならぬにしても、問題はやはり意味された「事柄」自体なのです。あるという単語の使用上の可能性を知ることが、存在自体の解釈に際して問題解明の手がかりにはなり得ますが、哲学の対象はあるという語ではなく、存在それ自体なのです。たしかに、存在論はあるという語、すなわち言語の中に与えられた存在の直観によって始めて可能となる、ということができそうですが、それは存在論が純粋に言語的な対象を扱うという意味ではありません。すべての学問は二つの点で言語を乗り越えるものです。ひとつは現実自体および言語の中には与えられていないもの（学問は新しいものを発見することもありますから）にむかってであり、もうひとつは言語を専門語 [Fachsprache] として特に規定することをめざしてです。そして専門語は言語の中に既に与えられているものに対しても、学問によってはじめて発見され区別されるものに対しても作られます。しかしそのどちらの場合でもその基礎及び出発点は言語の中にあります。（専門語も伝統的な言語に既に専門語としてあるもの、すなわち特殊語彙や術語として、単に世俗的な学問ではあっても一応「学問」と言えるものの表現であるものをその範例としています）。

言語の創造主体を絶対的に、すなわちその創造したものに対する関係だけについて考えた場合、言語は直観と表現の統一、意味の純粋な創造と考えることができ、そのようなものとして言語は詩作あるいは芸術一般に比することができます。芸術こそは存在の把握の第一段階だからです。（言語と詩作を同一視することの本当の意味も実はそこにあるのです）。詩作がそうであるように、言語も直観的意識内容の客観化であり、詩作と同様に言語も真と偽の区別、実在と非実在の区別に先立つものであります。したがっ

て絶対的言語は詩作であります³²⁾。

問題はそこで、いったい言語は「絶対的」なものか、われわれが言語を絶対的主体の活動と見なした場合にわれわれは言語を言語として正しくとらえているかどうか、ということ。直観の客観化、すなわち言語創造者対言語の関係は単に言語のもつひとつの次元にすぎないのです。言語には主体の「他者性」[Alterität]、すなわち言語を創造する主体が他の諸主体を前提とする、つまり言語を創造する意識が開いた意識である、という事実によって与えられているもうひとつの次元があります。ジョン・デューイ³³⁾はこのことに関連して、言語は客観的指示を持つが、それはまず間主体的な指示、他の主体に対する指示であり、それによって話された事が諸主体に共通なものとなり、客観的指示の基礎が得られるのである、と述べています。ハイデッガー³⁴⁾はもっと深く突っ込んで、コミュニケーションというものが現実可能なのは、話し合う者同志が既に或る共通なものを持っていて、それが話し合いの行為の中に現われるからである、と言っています。しかし、われわれはここで、単なる実際の現象で、場合によってはなくても済む他者への [an] 報知としてのコミュニケーションと、すべての言語的行為に前提される他者との [mit] コミュニケーションとを区別しなければなりません。言語は常に、その第一次的な創造においても、他者を目標としているものだからです。その意味で言語は社会的事実であり、個別言語はその話者たちに否応なく押しつけられるものである、と言った人もいます。しかし本当は言語はむしろ社会的現象すなわち人間の共在 [Mit-Sein] の基礎であると同時にその第一義的表現でもあるものなのであり、個別言語は強制としてではなく、自由に引き受けた義務として人間にとって拘束力を持つのです（拘束を意味するラテン語の *obligatio* も元来はそういう意味です）。そういうわけで言語は間主体性の表現でもあるわけですが、それは歴史的伝統的方向と同時代的共同体的方向の両方においてそうであります。しかし同時代的共同体的なものはまた歴史的なものでもありますから、言語の自由とはすなわち歴史的自由、歴史的な存在としての人間の自由であります。ジョヴァニ・ジェンティーレ³⁵⁾はかつてそれを次の様に表現したことがあります。「それでは『デスク』のかわりに『万年筆』と言うこともできるだろうか？ 抽象的にはたしかにそうである。しかし具体的にはそれはできない。なぜならそれを言う私は私の背後に、いや私の中に、ひとつの歴史を持っているからである。そして私とはこの歴史にはかならない。そのために私はこの様に『デスク』といい、またいわねばならず、ほかのいい方はせず、またできないのである。」言語がなぜいつも同時に個別言語、すなわち歴史的に成り立ち、また歴史的に与えられた言語であるのかが、これでおわかりだと思います。言語はたしかに存在の把握ではありますが、それは絶対的主体の側からの把握でも、経験的個別者の側からの把握でもなく、歴史的人間の側からの把握であり、そしてこの歴史的人間とはまさに歴史的人間であることによって同時にまた社会的存在でもあり、その意味で社会的人間の側からの把握ともいえるわけであります。

この意味において、言語は人間の定義の基礎をなすものであります。一方において、

それはロゴス、存在の把握であり、他方においてそれは間主体的なロゴス、人間の歴史性の形式であり表現であります。その意味で人間は歴史的存在として自ら創る言語的世界に生きているわけです。言語の本質には二つの次元があります。それは主体対客体の次元と主体対主体の次元です。言語一般 (langage) としては言語は第一の次元、すなわち人間が存在に対して持つ関係に対応するものです。しかし同時に個別言語として、言語は他の人間たちに対する関係に対応し、われわれはこの人間たちに対してまさに言語によってその「人間性」、すなわち存在の意味を問ひ、存在を解釈する能力を認めるわけです。しかしこの人間存在の二つの次元がまた、言語をはっきりと二つの次元をなすものとして解釈することによって始めて見えてくるものではありながら、根本的にはひとつのものであるということは、またほかのいろいろな問題と関係してくることで、それをここで論ずることはできません。

[注]

- 1) 原題は „Der Mensch und seine Sprache“ [人間とその言語]。1966年夏学期に Tübingen 大学で „Ursprung und Wesen des Menschen“ [人間の起源と本質] というテーマについて催された輪講の一環として Coseriu が神学者、哲学者、生物学者、考古学者、生化学者、動物学者と並んで言語学者として行なった講義。原文は他の講義と共に次の書物におさめられている: H. Haag/F. P. Möhrs (Hrsg.): Ursprung und Wesen des Menschen. Ringvorlesung gehalten an der Universität Tübingen 1966. Tübingen: Mohr (Siebeck) 1968, 67-79頁。E. Coseriu: SPRACHE. Strukturen und Funktionen [言語。構造と機能]。Tübingen: Narr 1970. 137-152頁 (第3版 1979. 91-103頁) に再録されている。この訳は後者 (第3版) によった。
- 2) Coseriu は人間の一般的言語行為としての「話^(a)」(話すこと) [独 Sprechen, 西 hablar, 仏 parole en général] と、或る言語の具体的個人的な実現としての「言^(b)」(言われたこと) [独 Rede, 西 habla, 仏 parole] を術語として区別する。しかし両者は別々の現実ではなく、或る人間が或る言語を話すという事態を、われわれは見方次第で一般的な、すなわち同じことがほかの場合あるいはほかの国語でも可能なひとつの話行為とも、あるいはその結果としての具体的な、その場で言われた言葉とも考えることができるわけである。それでここでは両者をあえて区別せず並置して人間が言語を話すという事態を示したものと考えられる。両概念について詳しくは Coseriu の論文 “Determinación y entorno” [話^(a)の限定と話局] (Romanistisches Jahrbuch 7: 1955, 29-54頁), [ドイツ語訳: „Determinierung und Umfeld“ (E. Coseriu: Sprachtheorie und Allgemeine Sprachwissenschaft. München: Fink 1975. 253-290頁)] 及び „Die Lage in der Linguistik“ [言語学の現状] (Innsbrucker Beiträge zur Sprachwissenschaft. Vorträge 9. Innsbruck: Institut für Sprachwissenschaft der Universität Innsbruck 1973, 5-15頁) を参照。
- 3) 言語によって表現される内容、すなわち広義の「意味」に Coseriu は三つのタイプを区別する: 「意味」[独 Bedeutung, 西 significado, 仏 signifé/signification], 「指示」[独 Bezeichnung, 西 designación, 仏 désignation], 「意」[独 Sinn, 西 sentido, 仏 sens]。 「意味」はその言語においてそれぞれの語、句、文について一義的に内容として与えられるものであり、「指示」の内容は言語的手段によって示される言語外の現実自体であり、「意」は言^(b)において生ずるその場の意味である。たとえば日本語の「僕」、「あした」、「私」はそれぞれが「意味」を持っているが、「指示」としては同じである。あるいは能動文と受動文は「指示」としては同じ内容を持つことができるが、その「意味」は異なる。ドイツ語の „Danke schön!“ [どうもありがとう] という句はシチュエーションによって断りの「意」(日本語の「結構です」)を持つことができる。翻訳は「指示」と「意」を再現するもので、「意味」を訳すことは

できない。Coseriu のこの区別について詳しくは上掲 (注 2) の論文 „Die Lage in der Linguistik“ 7頁以下、及び „Die funktionelle Betrachtung des Wortschatzes“ [語彙の機能的考察] (Probleme der Lexikologie und Lexikographie. Düsseldorf: Schwann 1976, 7-25頁) 7-8頁, „Semantik und Grammatik“ [意味論と文法] (Neue Grammatiktheorien und ihre Anwendung auf das heutige Deutsch. Düsseldorf: Schwann 1973, 77-89頁) 81-82頁を参照。

- 4) Hans Georg Conon von der Gabelentz (1840-1893) はドイツの言語学者。中国語日本語を含めて特に東アジアの諸語を研究し (Chinesische Grammatik [中国語文法] 1881), また独自の言語学論を展開した。その一般言語学上の主著 Die Sprachwissenschaft. Ihre Aufgaben, Methoden und bisherigen Ergebnisse [言語学。その課題と方法と成果] (1891, 第2版 1901) は近代言語学の樹立者とされるスイスの言語学者 Ferdinand de Saussure (1857-1913) の考えを多くの点で先取りしたものとして、ことに Coseriu 及びドイツの音声学 Eberhard Zwirner によって 1960年代にほとんど同時に再発見された。その Einzelsprache [個別言語] の概念は Saussure の langue の概念に、Sprachvermögen [言語能力] は faculté de langage に当る。Coseriu は 1967年に “Georg von der Gabelentz et la linguistique synchronique” [ガーベレンツと共時的言語学] (Word 23: 1967, 74-100頁) を発表し、1969年にこの論文のドイツ語訳を添えて Gabelentz の Die Sprachwissenschaft (上掲) 第2版のリプリントが出版された (Tübingen: Narr. 1972年再版)。なお、最近 DDR で次の論文集が出ている: E. Richter/M. Reichardt (Hrsg.): H. G. v. d. Gabelentz—Erbe und Verpflichtung [ガーベレンツ——その遺業の継承のために] (=Linguistische Studien, Reihe A, Arbeitsberichte 53. Berlin: Akademie der Wissenschaften der DDR 1979)。また Karl H. Rensch: „F. de Saussure und G. v. d. Gabelentz—Übereinstimmungen und Gemeinsamkeiten dargestellt an der langue-parole-Dichotomie sowie der diachronischen und synchronischen Sprachbetrachtung“ [ソシュールとガーベレンツ——その学説の一致点と共通点について] (Phonetica 15: 1966, 32-41頁) の好論文がある。
- 5) たとえば、アルバニア語の shqip [アルバニア人] は「意味がわかる」、ロシア語の slavjanin [スラヴ人] は sívo [語], némeč [ドイツ人] は nemó [おし], ケチュア語の runa simi [ケチュア語] は「人間の言語」、ギリシャ、ラテン語の bárbaros, barbarus [外国人、野蛮人] は「ムニャムニャしゃべる人間、舌の回らない人間」の意味、ないしそれと語源的に関係しているという。
- 6) 言語として与えられているもの (言語現象自体、個々の文や単語など) が世界の中の諸現象諸事態と対応するのは自然的必然性によるのか (phýsei 説)、それとも伝統、習慣によるのか (nómo あるいは thései 説) という問題は、西洋の言語哲学を古代以来支配した大問題で、たとえば有名な Platon の対話 Kratylos の中心的テーマをなしている。(Kratylos が phýsei 説、Hermogenes が nómo 説)。Coseriu はその Geschichte der Sprachphilosophie von der Antike bis zur Gegenwart. Eine Übersicht. Teil I: Von der Antike bis Leibniz [西洋言語哲学史概観。第1部: 古代からライブニッツまで] (Tübingen: Narr 1969. 第2版 1975) でそれについて詳しく述べている (特に 4-6. を参照)。これは言語に関する哲学者の空論ではなくて、Saussure の言語観の問題性もこの見地から捉えることができる。Coseriu の Sincronía, diacronía e historia [共時態と通時態と歴史] (Montevideo 1958), [ドイツ語訳: Synchronie, Diachronie und Geschichte. München: Fink 1974], II, 1.2. を参照。
- 7) 「言語記号は恣意的なものである」(“Le signe linguistique est arbitraire”) というのは Saussure の言語理論上の基本的テーゼのひとつで、たとえば「山」という表象はヤマという音の連結と別に必然的な関係を持たず、同じ表象が約束によって全く別の音の連結によって表わされることも考えられる。同じ表象が国語によって全くちがった音の連結によって表わされる (ヤマ, 独 Berg, 英 mountain) ことを見てもそれは明らかである。F. de Saussure: Cours de linguistique générale. Lausanne/Paris 1916 [日本語訳: 「一般言語学講義」, 岩波書店] 第1部第1章第2節参照。ただし、言語記号における表現 (音声面) と内容 (意味) の結びつきの恣意性は Saussure によっても絶対的に主張されたものではなく、また現代の言語学者

(たとえば Roman Jakobson) によっても必ずしも認められない。Coseriu はここで言語の非自然性、非因果性、歴史性⁽⁴⁾を調しているのである。

- 8) 言語の記号体系としての自律性はことに Saussure 以来近代言語学で強調される考えである。それによって個別言語の体系的な研究も可能になるが、この自律体系が客観的世界の秩序とどう対応するかという問題は、単に哲学的な問題として言語学者自身はあえて取り扱わないか、あるいは常識的な見解によって解決しがちである。Coseriu の言語理論は、後の叙述によって明らかになるように、この点をつきとめた上で成り立っている点に特色があり、多くの言語学者におけるように単に方法的な関心に導かれたものではない。それは、上述(注3)の「意味」(Bedeutung)、「指示」(Bezeichnung)、「意」(Sinn)といった概念の区別にも現われている。
- 9) 言語を即物的に単なる記号の体系と考えず、それを人間が使って行く現象全体、すなわち「話⁽⁴⁾」と考えた場合には、その体系について使用者である人間自身がいわば文法以前に直観的に持っている直接的知識が言語の重要な構成要素をなすことは明らかである。この知識は言語体系の使用規則ばかりでなく言語体系の要素の認知にも及ぶものである(次注参照)。そもそも人間の言語的直観の存在形式としての意味を問うことが、後述のように、言語学の本来的な使命と考えられるのである。
- 10) 言語が人間存在と不可分に結びついた現象であるならば、諸個別言語を説明するのに用いられるカテゴリー(品詞、文章成分など)は、言語一般の概念あるいは個別言語の概念に必然的にあるいは可能的に含まれるものと考えられる。その意味では、たとえば「英語の名詞」というカテゴリーはあり得ないわけである。近來、言語学ではいわゆる「言語の普遍性」について多く論じられる(たとえば雑誌「言語」第6巻第11号、1977、特集号参照)が、単に諸言語に見出される経験的一般性(Allgemeinheit)を言語自体の普遍性(Universalität)と見なす傾向が見受けられる。詳しくは Coseriu の 1972 年 Bologna の国際言語学会における講演「Les universaux linguistiques (et les autres)」[言語上(及びその他)の普遍的現象](Proceedings of the Eleventh International Congress of Linguists, I. Bologna 1974, 47-73頁)、[ドイツ語訳:「Die sprachlichen (und die anderen) Universalien」(B. Schlieben-Lange, Hrsg.: Sprachtheorie. Hamburg: Hoffmann und Campe 1975, 127-161頁)を参照。また「Über Leistung und Grenzen der kontrastiven Grammatik」(Probleme der kontrastiven Grammatik. Düsseldorf: Schwann 1970, 9-30頁)でも Coseriu はこの問題に触れている(特に 29頁)。
- 11) Wilhelm von Humboldt (1767-1835)。Coseriu は基本的に Humboldt 的言語観の持ち主である(後述参照)。Humboldt の言語哲学関係の論文は次の書物に収められている: W. v. Humboldt: Werke in fünf Bänden, III: Schriften zur Sprachphilosophie. Darmstadt: Wissenschaftl. Buchgesellschaft 1963。
- 12) 言語をそれ自体で機能するメカニズムと考える近代言語学に支配的な傾向に対して、Coseriu は言語の基礎を話者の言語知識にもとづく言語能力の中に見、この知識としての能力をギリシヤ哲学の *tékhne* の概念にならって「技術」[Technik]と呼ぶ。言語の基礎としての文法はその意味で話⁽⁴⁾の技術である。Chomsky はその生成文法の記述の対象としての competence[言語能力]を「the speaker-hearer's knowledge of his language」[話者・聴者のその言語についての知識]と定義した(Aspects of the Theory of Syntax. Cambridge/Mass.: M.I.T. Press 1965 [日本語訳:「文法理論の諸相」研究社]第1章参照)が、生成文法の実際の記述内容は文生成のメカニズムである。その最近の著書 Reflections on Language (New York: Pantheon 1975 [日本語訳:「言語論——人間科学的省察——」大修館]の第2部においても言語知識の問題が立ち入って論じられているが、この知識の本質ではなく、もっぱら外延の決定がはかられ、無意識な知識をも含めるために「know」にかわって「cognize」という術語を用いる事が提案されている。Coseriu のこの問題についての考えは上掲(注6)の Sincronia, diacronia e historia II, 3.2.2. 及び上掲(注3)の „Semantik und Grammatik“, 78頁以下に述べられている。
- 13) Gottfried Wilhelm Leibniz (1646-1716)。当該の表現(“cognitio clara vel confusa”,

“cognitio distincta vel inadaequata”) は De cognitione, veritate et ideis (1684) (Die philosophischen Schriften, hrsg. von C. J. Gerhardt, Berlin 1880, Bd. 4) 422頁以下に見出される(Coseriu の上掲書—注12—Sincronia, diacronia e historia, II, 3.2.2. 注による)。

- 14) 言語の生産性と言語変遷の事実との関連の理論的説明は Coseriu 自身の言語学的出発点をなすものであった。言(4)を個別言語の体系の単なる偶然的現実化、あらかじめ与えられたものの実現と考えず、体系的可能性の創造的生産的適用、主体的歴史的实现と考えることによっていわゆる言語変遷の事実を言語理論的に説明できるという Coseriu の考えは、当時の学界を驚かせた画期的なものであった。(後述参照)。
- 15) Saussure が言語の共時態(Synchronie)、すなわち一時点における言語状態と、通時態(Diachronie)、すなわち言語の歴史的発展とを言語学の対象として分離し、前者を言語学の第一次の対象としたことは、言語の体系的、構造的な研究を始めて可能ならしめた点で決定的な重要性を持つ言語学史上のイニシアチブであったが、この共時的言語観の根底にある言語の構造的把握の見地は言語の体系としての自律性を前提とするため、言語状態の変遷を理論的には認め得ず、それにもかかわらず言語変遷を事実としては認めねばならぬという難点を持っていた(上述参照)。アポリー [Aporie] の語源はギリシヤ語の *á-poros* [道なし] で、「難問」、「行きづまり」、「解決不能事」の意。
- 16) 論文の原題は詳しくは „Ueber die Verschiedenheit des menschlichen Sprachbaues und ihren Einfluss auf die geistige Entwicklung des Menschengeschlechts“ [人類諸言語の構造の相違とその人類の精神的発達に対する影響について]で、Humboldt の畢生の大研究である „Ueber die Kawisprache auf der Insel Java“ [ジャワ島のカヴィ語について]への序論として 1830-1835 年に書かれたものであるが、それだけで 400 頁に近い大論文である。引用文は Humboldt の上掲書(注11)の 418 頁に見出される。
- 17) Saussure の langue (記号の体系あるいは社会的事実としての言語)と parole (具体的個人的実現としての言語)の区別は、言語を客体として形式化してとらえようとすることによって生ずる抽象的对象と具体的対象としての言語の区別であり、Humboldt の *enérgeia* と *érgon* は言語を人間の主体との関連においてとらえようとすることによって生ずる動的対象と静的対象の区別である。この二種類の区別を組み合わせて Karl Bühler はその Sprachtheorie (1934) で四つの言語学の対象領域を区別している(同書 48 頁以下参照)。また Coseriu はこの Bühler の区別の図式を利用してその “Sistema, norma y habla” [体系と通常態と言(4)] (1952; 注 21 参照)で Saussure の langue と parole の概念の分析を行なっている(III, 2.3. 参照)。
- 18) Aristoteles はその形而上学で、存在の動相をとらえるために、*enérgeia* と *dýnamis* [ラテン語訳は *actus* と *potentia*] という概念を使い、芸術家の創造的活動がそのまだ手を加えられていない素材より前にあるように、動的現実、活動 (*enérgeia*) は可能性 (*dýnamis*) の前にある、とした。詳しくは Coseriu の上掲(注6)の Sincronia, diacronia e historia, II, 2.2. を参照。
- 19) Friedrich Wilhelm Joseph von Schelling (1775-1854)。„Gegenstand der freien Tätigkeit ist notwendigerweise unendlich, niemals vollkommen verwirklicht“ [自由な活動の対象は当然ながら無限であり、決して完全に実現されていることはない] (System des transzendentalen Idealismus, 1800, VI, 1) (Coseriu の上掲個所—注13—による)。
- 20) Chomsky はその生成文法 (Generative Grammar) のアイデアが Humboldt の生産 (Erzeugung) としての言語の見地に偶然符合することに事後的に気づき、1962 年の Cambridge/Mass. の国際言語学会における講演 “The logical basis of linguistic theory” [言語理論の論理的基礎] (後に Current Issues in Linguistic Theory [現代言語理論の問題点], The Hague: Mouton 1964. [日本語訳:「代言語学」の基礎」大修館]として出版)その他で Humboldt に言及した (Current Issues 17 頁以下参照)。有限の要素と規則によって無限に多くの新しい文を作る生産的、創造的な過程を生成文法がその形式的記述の試みにおいて始めてとらえたと考えるわけである。他方において Chomsky は、Humboldt がこの文の生成過程と民族言語の創造的成立過程とを同一視することに近代言語学的見地から批判を加え、前者を共時態に

- 関する“rule-governed creativity”〔規則に従う創造性〕、後者を通時態に関する“rule-changing creativity”〔規則を変える創造性〕として区別し、前者の把握は最近における論理学と数学基礎論の発達によって始めて可能になったものであるとした(上掲書22頁)。これに対して Coseriu はその „Semantik, innere Sprachform und Tiefenstruktur“〔意味論, 内的言語形式, 深層構造〕(Folia Linguistica IV, 1970, 53-63頁; 上掲一注1—Coseriu: SPRACHE. 177-185頁に再録)で Chomsky の Humboldt 理解の誤りを指摘した。上述(注15)のように共時態と通時態を現実として分離することには原理的困難があり、この困難の克服が言語一般の生産性、創造性の見地の導入によってのみ可能であるならば、いまその区別を創造性の概念自体の中に再び設けることには意味がないわけである。なお、Chomsky における創造性の概念の問題については K. Ezawa: „Zum Chomskyschen Kreativitätsbegriff“〔チョムスキーの創造性概念について〕(Kwartalnik Neofilologiczny XXIV, 1977, 223-234頁)を参照。
- 21) Coseriu の最初の言語理論的論述であり、その全言語学の理論的構想の基礎をなすと考えられる“Sistema, norma y habla”〔体系と通常態と言(々)〕(Montevideo 1952; E. Coseriu: Teoría del lenguaje y lingüística general. Madrid: Gredos 1962. 第3版 1973. 11-113頁に再録)〔ドイツ語訳: „System, Norm und Rede“ (上掲一注2—Coseriu: Sprachtheorie und Allgemeine Sprachwissenschaft, 11-101頁)〕は Saussure の langue の概念の批判から出発し, langue et parole による言語現象の両極化的区別をしりぞけ, 「(言語)体系」〔独 (Sprach-)system, 西 sistema (de la lengua), 仏 système (de la langue)〕, 「(言語)通常態」〔独 (Sprach-)norm, 西 norma (de la lengua), 仏 norme (de la langue)〕, 「言(々)」〔独 Rede, 西 habla, 仏 parole〕の三段階の区別を提唱した野心的な試みであった。(後に更に「(言語)類型」〔独 Sprachtypus, 西 tipo lingüístico, 仏 type linguistique〕の概念が「体系」の上に加えられた。しかしこれは、しばしば誤解されているように、単に客体化された言語の諸事実の新しい分類, 段階づけを試みたものではなく、言語の主体, すなわち人間の側に立ってその知識としての言語能力(注12参照)の中に与えられている表現の諸様式, モデルを段階的に区別したものである。すなわち、人間は言語を通常その伝統的な様式(通常態)にしたがって実現するが、それは人間が同時にその言語知識として持つ、より抽象的な機能的モデル(体系)によって与えられているより多くの表現可能性の中からそれを歴史的社会的に普通(normal)なものとして特に選んでいるのである(たとえば日本語ではサンニン、ニンと言ってイチニン、ニンとは普通言わず、逆にヒトリ、フタリと言ってもミッターリ、イッターリとは言わない)。この事実は、子供の言葉を観察すると特によく確認される。言語の歴史的動態、人間の相対的言語的自由、文学作品の可能性(後述参照)などは、言語をそのように多層的知識として見ることによって始めて理解することができる。
- 22) ギリシャ語の (lógos) は第一義的には「言(々)」(Rede) の意味を持ち、Aristoteles は、主語について或る性質が主張あるいは否定される命題文としての言を lógos apophantikós [定める言] と呼んだ。すべての言は何事かを意味するものとして lógos sēmantikós [意味する言] であるが、lógos apophantikós はそれが特に命題的限定を受けた場合で、Aristoteles はそれ以外の限定(行為的限定、詩的限定)もあることを暗示している。詳しくは上掲(注6)の Coseriu の Geschichte der Sprachphilosophie I, 9. 19. を参照。
- 23) Rudolf Carnap (1891-1970)。ドイツの哲学者、いわゆるウィーン学派の中心的存在の一人で、1936年以来アメリカにあり、科学言語の記号論理学的分析によって知られる。
- 24) Wilbur Marshall Urban (1873-1952)。アメリカの哲学者。主著は“Language and Reality” (1939)。
- 25) 「表現」(Ausdruck) は言語記号の物質的側面(音声面)あるいは音声的表象を意味し、「意味」(Bedeutung) は記号の内容的側面で、単に「内容」(Inhalt)とも言う。言語記号は「表現」と「意味」(あるいは「内容」)、(Saussure の術語によれば「能記」(signifiant, Bezeichnendes) と「所記」(signifié, Bezeichnetes)) から成り、記号の存在はこの両面の意識内での結合に基づく。近代言語学は Saussure の記号学(Semeologie, Semiotik)としての言語学という構想に由来した。Saussure: Cours de linguistique générale (上掲一注7), 序論第3章§3参照。
- 26) 事実アメリカの言語学では meaning が多く指示 (Bezeichnung) の意味に用いられ、言語内的な意味 (Bedeutung) が無視される。Leonard Bloomfield (1887-1949) 以来アメリカ言語学の主流をなした behaviorism [行動主義] は mentalism [内観主義] に反対して、客観的に観察し得る現象だけを研究の対象としようとした結果、音声的、形態的単位の分類的研究を主とし、言語の意味 (Bedeutung) を言語学的対象として否定した。
- 27) 世界はそれ自体としては連続体 (Kontinuum) として与えられているが、言語はその記号性によって、すなわち或る音声的結合を一定の意味とだけ結びつけ、他のすべての意味を排除することによって、一義的な区別 (Distinktion) という行為を人間に可能ならしめる。「体系」(注21参照)とは、このような区別を可能ならしめる対立的諸関係 (Oppositionen) の機能的統一体である。
- 28) いずれも古代ギリシャの架空の動物で、ケンタウロスは半人半馬、トラゲラフォスは山羊鹿。
- 29) 個別言語間の存在認識上の相違、あるいは個別言語に依存したわれわれの存在認識については、Ernst Leisi: Der Wortinhalt. Seine Struktur im Deutschen und Englischen (1952; 第4版 Heidelberg: Quelle & Meyer 1971) [日本語訳: 「意味と構造」研究社] 及び Benjamin Lee Whorf: Language, Thought and Reality (Cambridge/Mass.: M. I. T. Press 1956) [日本語訳: 「言語・思考・現実」大修館] を参照。 I J
- 30) 注10参照。「こうこうであること」とは概念的存在であり、概念的存在とは、一般的言語的可能性として、個別言語以前のもの、すなわち普遍的なもの (Universelles) である(たとえば「名詞」、「動詞」など)。個別言語はこれを具体的な個々の例(「いえ」、「あるく」など)として個別的に形成するわけである。固有名詞(「東京」、「本平首相」など)は一見存在者自身を直接に指示するように見えるが、やはり概念的存在を通して(「場所」、「個人」といった概念を前提とする)。それですべての固有名詞は普通名詞で言いかえられるが、すべての普通名詞について固有名詞が見出されるわけではない。
- 31) Coseriu の三種の学の区別(一般者の学としての学、歴史としての学、哲学としての学)については、詳しくは上掲(注6)の Geschichte der Sprachphilosophie I, 第1章を参照。
- 32) Coseriu の言語即詩作観については、„Thesen zum Thema Sprache und Dichtung“〔言語と詩作についての覚え書〕(W.-D. Stempel, Hrsg.: Beiträge zur Textlinguistik, München: Fink 1971. 183-188頁)を参照。Coseriu のいう「直観」(Intuition) は哲学的概念で Platon の「想起」(anámnesis)、Augustinus の「内なる師」と一致し、単に心理学的な概念ではない(上掲一注6—Geschichte der Sprachphilosophie I, 12.5.参照)。
- 33) John Dewey (1859-1952)。引用については“Logic. The Theory of Inquiry” (New York 1938), 46頁参照(Coseriu の上掲書一注6—Sincronía, III, 1.2., 注5による)。
- 34) Martin Heidegger (1889-1976)。以下の Heidegger の考えについては „Sein und Zeit“ (Tübingen: Niemeyer 1927; 1977), 155, 162頁参照。
- 35) Giovanni Gentile (1875-1944)。引用文は“Sommario di pedagogia come scienza filosofica”, 1 (Firenze 1954), 65頁にある(Coseriu の上掲書一注6—Sincronía, III, 1.2., 注2による)。